

ハ構文のスキーマ形成と社会的機能

遠山 千佳

1. 「ハはトピックを示す」で十分か？

大学や大学院で学位を取得するために課されるレポートや論文では、論理的な思考が必要とされるとともに、それを表現するための言語的手段も重要となる。言語手段の中でも何について述べているかを明確にする働きをもつものに、主題（トピック）を標示する助詞ハがあるが、〈トピック - コメント〉を表すハ構文は日本語学習の初期から使用されているにも関わらず、超級レベルになっても運用の難しさが残る(坂本他 1995)ことは現場で痛感する教師も多いだろう。これは「ハは主題を示す」という説明が、日本語学習者にとっては十分な説明となっていないことを示唆しているのではないだろうか。

堀江(2004)は内容語に比べ機能語はその表す意味が抽象的であるため、談話の中で果たしている機能を観察することによって初めてその本質が理解できることが多いとしている。機能語である助詞ハは文法的制約が少ないが、それゆえに学習者はそれを談話の中で観察し、使用することで習得していくのではないだろうか。では、実際に使用されているハの機能とはどのようなものか。

2. 先行研究

2.1 認知・機能言語学における機能

‘What you need most is good rest.’のような疑似分裂文(pseudocleft sentence)の機能は「強調」であると従来分析されてきたが、Hopper(2001)は自然会話における疑似分裂文の機能を分析し、「これから話すことが注目に値することだと注意をひく」など5つの機能を抽出している。そして自然会話における構文の機能と、書き言葉や編集された会話テキストにおける構文の機能は異なるとし、前者は「社会的」重要性をもって聞き手に効果的に話し手の意図を伝えるための機能であるとしている。一方、会話データから抽出された機能を「文化的」に修正したものが

書き言葉であるとしている。このように、認知・機能言語学(堀江 2004)では、話し手と聞き手による相互行為としての言語使用の中で、構文の機能が捉えられている。

2.2 用法基盤モデルに基づく文法知識

このような文法の捉え方として、早瀬・堀田(2005)は文法知識、つまり意味と形式との対応をなす記号体系は、人間による使用に関わることによつて変化する永続的に可変的な構造であるとしている。その文法知識は、経験した発話事態(usage event)をもとに、そこから徐々に抽出され、スキーマと具体例を含むカテゴリー化された総体として存在するとされる。このように文法が、発話時の場面、文脈、社会背景を取り込み、他者との相互作用の産物であるとして捉えられる考え方(Kemmer and Barlow, 2000)は、実際の言語使用によつて言語現象を説明する「用法基盤モデル(usage based model)」の考え方に基づく。

2.3 学習者にとってのハの機能

これまで行われてきたハの習得研究は、ハの機能が主題化であるということ的前提に行われてきたものが多いが、学習者が必ずしもそう理解していないことも示されている(八木 2000)。

そこで本研究では、日本語学習者が実際の言語使用において、ハ構文をどのように使用しているか、自然会話を対象に用法基盤モデルに基づいた分析を行い、ハ構文の談話における機能を抽出することを目的とした。八木が学習者がハによつてどのような文成分を標示しているかを分析し、学習者が習得しているハの機能を探っていることから、研究課題を以下のように設定し、量的(タイプ頻度)及び質的な調査を行った。

(1)日本語口頭運用レベルによつて、ハで標示している文成分に違いがあるか。あるとしたらどのような違いか。

(2)日本語口頭運用レベルによって、ハ構文の相互行為における機能に違いはあるか。あるとしたら、どのような違いか。

3. 研究方法

3.1 対象資料

データは、KY コーパス、およびベースラインの資料として上村コーパスの母語話者データを用いた。

KY コーパスの使用において以下の点について確認しておきたい。KY コーパスは OPI によってデータ収集を行い、レベル評価をしたものである。OPI の評価は「～ができる」というようなコミュニケーションにおける can do 方式であり、評価者がなぜそれができると判断するのか、例えばどのような言語使用が「正確で流暢な話し方(超級)」と判断されるのか、「論理的に詳細を説明することができる(上級の上)」のは対象者がどのように言語を使用しているからか、などについては評価基準に述べられていない。対象者によりさまざまな観点から総合的に判断して評価されると考えられるが、その評価判断の仕方を考えると「超級」だから「こういう言語使用ができる」というのではなく、「こういう言語使用ができる」ことも1つの理由として総合的に「～ができる」能力へと結びついていると考えられる。つまり『『上級-中』の話者は、<中略>主な時制(過去・現在・未来)の枠組の中でアスペクトを適切に使って、詳細に叙述したり描写したりする能力を持っている(『ACTFL 言語運用能力基準—話技能(1999年改訂版)』)』というのと同様に、どのレベルの話者がどのようなハ構文の相互行為における機能を使用しているのかを抽出することが本研究の目的である。したがって、本稿において「超級レベルではこのような機能が見られた」というとき「それは超級だからだ」というのは理由にはならない。レベルが上がるにつれてどのようなハ構文の機能を使えるようになるかを探るのが目的である。

機能語の中でも、テンスやアスペクトを表す機能語や格助詞と違い、ハの運用の制約は話し手や聞き手がどう談話を理解しているかという見えない要因に依存しているため、文法的な誤用は出にくい。本稿の目的である相互行為におけるハ構文の機能は、現在ほとんど分析されておらず、「～ができる」ことへの見えない貢献をしているともいえる。

3.2 分析手順

まずテキストエディタ(「秀丸エディタ」)を用い、ハを全て抽出した。その中で助詞ハに標示される部分と述部があるもの、あるいは述部なくても回復できるものを対象とし、「～てはいけない」など前後の文成分から切り離せないと考えられるものを除いた。次に、それぞれのハ構文のハがどのような文成分をトピック化しているかを分類し、レベル別にタイプ頻度(次節参照)を分析した。更に産出されたハ構文が標示している部分がそれまでの発話に出現しているもの(照応)と出現していないもの(非照応)に分類し、対象者が自ら産出したハ構文(非照応)と、インタビュアーの質問に促されたりそれまでの発話の流れから産出されたりしたハ構文(照応)に分け、それぞれのハ構文が相互行為の中でどのように機能しているかを質的に観察した。本稿では、対象者が自ら産出した非照応のハ構文に焦点を当てる。

3.3 頻度効果

3.3.1 習得における使用頻度の意味

コミュニケーションによる言語経験を通じた言語習得においては、ある表現の使用頻度が重要な意味を持つと早瀬・堀田(2005)は述べている。そして使用頻度が高くなるとその表現の定着度が高まり、複数の語からなる句表現なども1つの処理ユニットとして記憶に蓄えられるため、活性化されやすくなり、それに伴いアクセスされやすく、利用されやすくなるという変化をもたらすという。つまり、ある表現の使用頻度は、認知処理の方法に変化を与える原因となり、文法体系を作り上げていく推進力をもつとしている。本研究では、このような創造的な力をもつと考えられる頻度に注目し、自然会話におけるハ構文の分析を行った。

3.3.2 トークン頻度とタイプ頻度

用法基盤モデルに基づく頻度の概念により、頻度は大きく2つの種類に分けられる。1つは、「トークン頻度」といい、具体的に何回出現したかという頻度である。これは、その表現がどの程度固定表現として確立しているかという度合いを示す。もう1つは「タイプ頻度」といい、1つのスキーマ的表現の適用範囲がどの程度広いかを示し、そのスキーマの生産性を意味する。どちらもある言語表現がコミュニケーションの中で、どう用いられたかを示すものである。

本研究では、対象データが日本語学習者の自然会話ということで、繰り返しや言い直しが多いことがトークン頻度に影響を与えるため、タイプ頻度のみを分析対象とした。

4. 結果と考察

4.1 ハで標示された文成分：タイプ頻度の分析

表1はどの文成分がハで標示されたかをレベル別に示している。網かけ部分がハで標示されたレベルである。*（アスタリスク）はハで標示されない形式が現れた部分である。例えば、「～くない」という表現は初級中から出現しているが、「～くはない」とハが使用されたのは、上級上以上のレベルであることを示す。また、主語のガのハによる標示は初級下から現れているが、格助詞のままのガは初級下には現れていないことを示す。NSは日本語母語話者の発話に現れた場合は○で示している。これはインプット頻度を示唆すると考えられる。

4.2 非照応のハ構文の分析

前節のタイプ頻度の分析結果を合わせて、本稿では非照応のハ構文がどのような機能を遂行しているかについて述べる。

まず、初級から中級下におけるハ構文の使用において、初級下では、ガ格のハ構文、初級中では時をハで標示するハ構文が見られる。初級下で見られるガ格のハ構文は、6例中4例が自分の名前の紹介であり、インタビューの「私はTです」に続いて「私はSです」と続く。他2例のうち1例は、Tの「家はどこですか」という問いに対して「私はんー、日本語、すく（日本語は少ししかわからない）」と、自分の日本語能力に限界があることを述べている。このレベルでハが標示しているのは、全6発話中、全て「私」である。新しい共同体に入った時、「私」とはどういう者かということ述べる必要性は多いと考えられる。初級下レベルでは、会話のやりとり以前に、まずは自分についての認識を相手に

表1 レベル別ハによって標示された文成分

レベル	名詞(句)+ハ						名詞(句)+格助詞+ハ					名詞(句)+助詞相当句+ハ					その他+ハ				
	が・主	が・目	を	に・へ	時	場所	外の関係	ニ	デ	カラ	ヨリ	マデ	ト・引用	〜に対して	〜によって	〜にとって	〜について	〜として	〜において	〜(ない)	〜て
初下		*							*	*											*
初中	*	*	*		*			*	*	*		*	*							*	*
初上	*	*	*		*			*	*	*		*	*			*				*	*
中下	*	*	*		*			*	*	*		*	*			*				*	*
中中	*	*	*		*			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		*	*
中上	*	*	*		*			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		*	*
上	*	*	*		*			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		*	*
上上	*	*	*		*			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		*	*
超	*	*	*		*			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		*	*
NS	○	○	○		○			○	○	○	○	○	○					○	○		

※「名詞(句)+ハ」の「に・へ・場所」の「*」は「名詞(句)+格助詞+ハ」として捉え「*」の対象から外した。

「外の関係」は語用論的な文構造であり、ハが後置されない場合は「*」の対象から外した。

ハによって標示された文成分は、大きく①名詞句+ハ、②名詞句+格助詞+ハ、③名詞句+助詞相当句+ハ、④その他+ハに分析された。初級では、①～②、中級では①～③、上級・超級では①～④の構成が出現し、階層性が見られた。

してもらおうという相互行為の第1歩を「私は～」というハ構文によって行っていると推測される。

次に、習得されるのが時の表現のハ構文である。コメントされる事態の時を述べることは自分の立ち位置を示す。また順序を表すという基本的な記述を行う場合、時の枠組みを移すことで、順序を表現す

ることは、日本語レベルが低い時には戦略として便利な表現といえる。談話においてある発話における1つの構文が1つの機能のみを遂行するわけではない。特に発話量の少ない段階では、1つの構文が複数の発話機能をもつことが考えられる。

中級中以上になると、「～よりは」「～までは」のように、言及範囲を限定するような精緻化がみられる。この表現を使うためには、聞き手がどのように自分の話を理解するか推測しなければならない。更に中級上以上では、「～とはいえない」などの論理性を必要とする言い方が現れる。中級になると、初級のように質問された内容に対して答えるハ構文とは違い、インタビュアーと相互行為的に談話を構築していくための機能が確立されていくようである。またこの段階で、さまざまな文成分がハで標示されるようになり、さまざまな事柄をトピック化することができ、ハ構文の<トピック-コメント>という抽象的構文スキーマが形成されてくると考えられる。

更に上級以上になると「助詞相当句+ハ」という形が現れる。この形式は日本語母語話者の使用も少ないことからインプットも少ないと考えられる。対象者はこの形式を利用し、自らトピックを提示し、談話を展開している。ハ構文により言いたいことをより正確に表現したり、詳細なニュアンスを伝えたりすることができるようになってくる。

4.3 結果のまとめ

1) 日本語レベルが上がると、ハ構文のタイプ頻度が増加する。

2-1) 日本語レベルが上がると、ハ構文の相互行為における機能、つまり参加者同士が談話を創りあげていくための機能が増加する。

2-2) <トピック-コメント>というハ構文の抽象的スキーマを形成するということは、さまざまな文成分をトピック化できるということである。これらを使用することにより、話し手は聞き手の理解を精緻化したり、より正確な表現によって伝えたりすることができる。つまり、ハ構文はそのような具体的な機能を相互行為において遂行しているといえる。

5. 日本語教育への示唆と今後の課題

本稿では、従来の「ハはトピックを示す」という

説明が日本語教育において十分なのか、という疑問から始まり、相互行為において話し手がどのようにハ構文を使用し、どのように機能させているかを観察した。その結果、対象者がさまざまな文成分をトピック化することができる、つまり抽象的なくトピック-コメント>というハ構文のスキーマを形成することにより、OPIのような話し手と聞き手が対等でないインタビューにおいても、相互行為的に談話の構築を促進させていくことができるようになることが示唆された。このような相互行為における社会的な機能に焦点を当て、ハ構文によってどのような言語行為を行うことができるかを示す導入、練習なども可能であると考えられる。

本研究では、コーパスを用いて文脈からハ構文の社会的機能の分析を行った。今後は、フォローアップインタビューなどにより、対象者の発話意図を実際に確認できるような研究が必要であろう。また、今回は OPI インタビューという限定されたジャンルでの分析であった。他のジャンルにおける分析をすることも必要であると考えられる。

参考文献

- 坂本正・町田延代・中窪高子(1995)「超上級日本語話者の発話における誤りについて」, *proceedings: The 6th International University of Japan Conference on SLR in Japan*, 66-94.
- 早瀬尚子・堀田優子(2005)『認知文法の新展開—カテゴリー化と用法基盤モデル—』研究社
- 堀江薫(2004)「談話と認知」『認知文法論Ⅱ』, 247-278.
- 八木公子(2000)「「は」と「が」の習得—初級学習者の作文とフォローアップインタビューの分析から」『世界の日本語教育』10、91-107.
- Hopper, J.P. (2001) Grammatical constructions and their discourse origins: prototype or family resemblance?, In M. Putz, S. Niemeier, R. Dirven (eds.) *Applied cognitive linguistics 1: Theory and language acquisition*, Mouton de Gruyter. 109-130.
- Kemmer & Barlow (2000) Introduction: A usage-based conception of language, In M. Barlow & S. Kemmer (eds.) *Usage-based models of language*, CSLI, 1-64.
- ACTFL 言語運用能力基準—話技能 (1999年改訂版) http://www.opi.jp/shiryu/actfl_guide.html

とおやま ちか/立命館大学
tohyama@law.ritsumei.ac.jp